



所内オ1回写真コンクール 参加作品  
「海底調査を終えて帰路につく神鷹丸」

燃料部 石炭課 喜多河 庸二

## 「海底調査を終えて

### 帰路につく神鷹丸」

海底の地形は普通水深はば200mの等深線を境として、深い側は急斜面となり水深は急速に増大するのに、反対に水深の浅い部分は陸岸までほとんど水平に近いゆるい傾斜面を形成しているが、この部分は特に大陸棚と呼ばれ、漁業のほか海底を対象とする鉱工業にはきわめて重要な場所である。従つて一部の国家間では大陸棚分割領有論まで論議されている。

日本近海の大陸棚はその広さが陸域の約75%にあたり、一方九州と朝鮮とは大陸棚でつながっている。大陸棚の鉱物資源については今のところまだ未調査の状態であるが、石炭や石油・天然ガスなどの資源が膨大に埋蔵されていることは、陸域に発達するそれらの調査から推測しても疑う余地がない。

かように資源的にも国際的にも重要な大陸棚の調査に

ついては海底炭田や油田などのような資源調査ばかりでなく、従来の陸の地質図に匹敵するような**大陸棚地質図**を、まず完成する必要がある。また他方調査器具の改善についても並行して推進することが重要である。

## 地球化学課新設さる

地質調査に必要な地球化学的研究を目的として、昭和30年8月1日付で技術部に地球化学課が新設された。

近年になつて物理学的資料および化学的資料の裏付けにより調査結果の地質的解釈が立てられる傾向が強くなつてきている。前者については地球物理学および物理探査技術の進歩に伴つて、その成果には目覚ましいものがあるが、戦後は化学界における地球化学的研究も急激に隆勢となり、昨年は地球化学研究会がわが国にも誕生した。

金属鉱床に対する化学探鉱法はすでに研究の域を脱し、各鉱山会社では電気探鉱法と併用して探鉱に用いているが、地質調査所では水溶性天然ガス鉱床の調査に地球化学的な考え方を導入し、その結果わが国の天然ガスの開発利用を飛躍的に増進させた。また水理地質調査の

際の地下水の地球化学的資料は、調査結果の解釈に定量的要素を加えるものとして重要視されている。

このような気運のもとに生れた**地球化学課**は次の3研究室からなつている。

オ1研究室：岩石・鉱物中の同位元素の研究

オ2研究室：岩石・鉱物中の微量成分の研究

オ3研究室：地質鉱床調査に必要な地球化学技術の応用研究

これらの研究業務を行うためには、まず研究施設・器械の整備等が必要であるが、同時にわが国の地球化学に関する資料の収集と整理も始めなければならない。

地球化学課の今後の育成については、各大学・研究所・会社等の化学・物理・鉱山・地質等の専門家の各位のみならず、広く皆様の御支援をお願いする次才である。

(技術部 地球化学課)